

MTX が生命予後に関与している可能性が示唆された。今後は病型別の治療方針を確立していくためのプロスペクティブな検討が必要である。

(平成 22 年度東京医科大学研究助成金 受給)

P3-51.

視神経炎患者の末梢血単核球サイトカイン産生とステロイド治療に対する反応性の検討

(眼科学)

○平野美恵子、毛塚 剛司、臼井 嘉彦
馬 娟、安 暁明、山川 直之
後藤 浩

(内科学第三)

増田 眞之、加藤 陽久、大塚 敬男
内海 裕也

【目的】 視神経炎患者に対する副腎皮質ステロイド薬（ステロイド）の薬剤感受性を明らかにするために、末梢血単核球（PBMC）由来のサイトカインを測定し、臨床経過との関連性を検討する。

【対象と方法】 対象は活動性のある視神経炎患者 10 例（男性 3 例、女性 7 例）、27 歳～65 歳（平均 42 歳）、平均観察期間は 6.2 か月である。全例ステロイドの投与前に PBMC を採取、分離し、コンカナバリン A（ConA）および異なる濃度のベタメサゾンと 24 時間共培養し、上清中の IFN- γ 、TNF- α 、IL-2、IL-4、IL-6、IL-10、IL-17 を Cytometric Bead Array Flex kit と ELISA 法で測定した。これらのサイトカイン産生量と臨床経過を比較検討した。

【結果】 初診時視力は手動弁から 0.08 で、ステロイド治療後の最高視力は 10 例中 9 例が 0.9 以上であった。ベタメサゾン添加によるサイトカイン産生の減少率と視力の改善は有意に関連していた。ステロイドの平均総投与量はプレドニン換算で $4,460 \pm 2,480$ mg であり、個々の症例の総投与量と培養内ベタメサゾン添加によるサイトカイン産生の減少率には有意な関連性は認めなかった。なお、ベタメサゾンを培養細胞に添加した際に IL-17 産生の減少が乏しかった 1 例は、ステロイド総投与量が 6,000 mg にもかかわらず視力の改善が得られなかったため、血漿交換療法を行い、最終的に視力の改善を得た。

【結論】 in vitro における PBMC のステロイド感受

性試験は、ステロイド治療に対する視力予後判定や、至適治療法を決定するうえで有用な指標となる可能性がある。

P3-52.

ベーチェット病ぶどう膜炎の診断基準確立に向けた統計学解析

(眼科学)

○坂本 俊哉、横井 克俊、松永 芳径
臼井 嘉彦、森 秀樹、毛塚 剛司
坂井 潤一、後藤 浩

【目的】 ベーチェット病（以下 BD）に伴うぶどう膜炎は、サルコイドーシス、Vogt-小柳-原田病について頻度が高く、重要な疾患である。サルコイドーシスについては研究班により「眼サルコイドーシス診断のてびき」が、Vogt-小柳-原田病については国際診断基準が定められており、日常診療でも応用されている。一方、BD については 1987 年厚生省特定疾患ベーチェット病調査研究班から眼症状の診断指針が提示されているが、記載事項は多くのぶどう膜炎に共通してみられる眼所見や眼合併症であり、特異的なものではなく、診断に結び付く内容とはなっていない。

そこで、BD にみられる眼所見の発現頻度と本症を示唆する検査所見の診断的価値を統計学的に解析することによって、他のぶどう膜炎との診断上の差別化を図り、BD にみられるぶどう膜炎の眼科独自の診断基準を確立することを目的とした。

【対象と方法】 2005 年 1 月～2009 年 10 月に当院眼科ぶどう膜外来を受診した BD 患者 106 例とその他のぶどう膜炎患者（対照）89 例を対象とした。診療録をもとに、BD に特徴的な眼所見と BD を示唆する検査所見の診断的価値を検討し、診断的価値が高いと考えられる所見を抽出して診断基準項目を設定する。診断上の感度、特異度を解析し、診断的価値を検討する。

【結果】 ① フルオレセイン蛍光造影（FA）上羊歯の葉様漏出、FA 上びまん性黄斑浮腫 ② びまん性硝子体混濁、前房蓄膿 ③ 両眼性、嚢胞様黄斑浮腫、④ 後極部滲出斑、再発性非肉芽性虹彩炎 ⑤ HLA-B51、以上 5 項目から構成される診断基準項目を作成した。5 項目中 3 項目以上がみられた場合、BD

ぶどう膜炎と診断する場合の感度は94.4%、特異度は95.5%であった。

【結論】 BDにおけるぶどう膜炎の診断基準確立に向けて一定の指針を示すことができた。今後はこの基準の妥当性について前向きに検討していく予定である。

P3-53.

健診で検出した緑内障の視神経乳頭の経年変動について

(健診予防医学センター)

○末木 房世、柴垣 圭子、板山 由美子
遠藤 成美、代田 常道

(中央検査部)

上道 文昭

【目的】 近年、健診の眼底検査による緑内障の検出が話題になっている。

今回我々は緑内障を検出した眼について、視神経乳頭が経年によりどの様に変動しているか検討したので報告する。

【対象】 当センターは健診業務を24年間、眼科医による眼底写真の読影を14年間行っている。その間に当センターにて眼底写真の読影により緑内障を検出し、当院眼科で緑内障と診断された受診者の中から、緑内障検出の前後なるべく長期間追跡できた9人18眼を、対象とした。

【方法】 検出所見である乳頭出血、網膜神経線維層欠損、乳頭辺縁消失、乳頭縁血管屈曲について、経年によりどの様に変動したかを検索した。なお検索にあたり、対象とした9人18眼について、各年の眼底読影結果を、上記四つの所見を縦軸に西暦を横軸にした表にあてはめ、緑内障検出時の年齢と視野検査の結果を追記した一覧表を作成した。

【結果】 上記のような一覧表に整理し得た眼数は18眼であった。

その結果、乳頭出血→網膜神経線維層欠損→乳頭辺縁消失→乳頭縁血管屈曲と変動することを追跡し得た。

【考察】 健診で検出された緑内障の視神経乳頭所見は加齢性、進行性、構造変化が認められた。

緑内障の検出にはこの変動について理解し、読影することが有効であると考えた。

P3-54.

種々の眼疾患における中心動脈圧値と Augmentation Index

(八王子：眼科)

○廣瀬麻衣子、田中 孝男、横井 克俊

(八王子：循環器内科)

高澤 謙二

(大学)

臼井 正彦

【目的】 中心動脈血圧 (cSBP) や Augmentation Index (AI、駆出圧波と全身からの反射圧波の比) を測定し、各値と循環不全を呈する眼疾患との関連を検討した。

【方法】 中心動脈血圧推定機器 (HEM-9000AI) を用いて末梢血圧 (BP)、cSBP や AI を測定し、各値と疾患の関連を検討した。対象は271例 (男性166、女性105、平均64歳) で、循環障害の関与が考えられる疾患群224例 [増殖糖尿病網膜症 (PDR) 17、非増殖糖尿病網膜症 (NPDR) 17、網膜静脈閉塞症 (RVO) 7、眼虚血症候群 (OIS) 14、広隅角緑内障 (OAG) 145、狭隅角緑内障 (ACG) 12、内眼炎12] と出血等明らかな循環不全に伴う眼所見を呈さない47例 [背景疾患として糖尿病6、高血圧 (HT) 11、健常者30] を対照として比較した。

【結果】 BP、cSBP と AI (mmHg, mmHg, %) の平均値は循環不全群 (148, 154, 86)、対照群 (141, 144, 78) で何れも二群間で有意差 $p < 0.05$ を認めた。疾患別には PDR (161, 167, 88)、NPDR (141, 140, 73)、内眼炎 (128, 133, 80)、RVO (141, 145, 73)、OIS (154, 164, 90)、OAG (149, 156, 87)、ACG (137, 142, 76)、HT (156, 161, 82)、健常者 (132, 134, 74) であった。PDR、OAG、OIS、HT における BP、cSBP と AI は健常群の各値に較べて有意に高値を示した (各 $p < 0.05$)。

【結論】 種々の眼循環不全を来たす疾患に大循環の脈圧変化が関与することが示された。治療は、眼局所の治療に併せて全身的に cSBP を降下させることや血管を拡張させ AI の改善を図ることも重要である。